別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　号

氏　　名　大多和　賢登

論　文　題　目

Analysis of relationship between superior hypophyseal artery visualization and preservation and postoperative visual field deficit in paraclinoid aneurysm

（傍前床突起部脳動脈瘤における上下垂体動脈の描出と 温存による術後視野障害の関係性についての解析）

論文審査担当者

主　査　　委員　名古屋大学教授　長縄慎二

委員　名古屋大学教授　勝野雅央

委員　名古屋大学教授　亀井譲

指導教授　名古屋大学教授　齋藤竜太

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

今回、未破裂傍前床突起部脳動脈瘤症例63例に対して血管内治療を行い、その際の血管撮影にて上下垂体動脈（SHA）描出の有無と、治療後にSHA血流障害に起因する視野障害発症の有無を後方視的に検討した。検討の結果、26例（41%）でSHAを描出し、その内11例が動脈瘤ネックからSHAが起始していた。その11例に対して追加解析を行い、内2例がコイル挿入前にSHAを認知し得たため、それを温存するようにコイル塞栓術が施行された。ほか9例はSHA描出の有無に留意することなく手術を施行し、1例で術後視野障害が出現したものの一過性に留まり永久的後遺症は呈さなかった。この結果として、SHAが可視化し得えず、通常通りのコイル塞栓術を施行した症例であっても視野障害を発症する可能性は低いものの、明らかに太く描出し得た症例では温存するほうが望ましいと思われた。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1.本症例の術後フォローアップを当院外来にて行っているが、研究期間内では再発症例を認めなかった。さらなる長期フォローアップにて再発する可能性はあるものの、SHAに留意して塞栓した症例は2症例と少ないため、今後の症例の蓄積が必要と考えられた。

2.我々が渉猟した限りではSHAを画像検査にて描出を試みた論文は認めなかった。直達手術では、SHA障害による視野障害出現の報告は散見されており、SHAを描出することの意義はあるものと思われた

3.今回は症状を訴えた症例のみ、眼科での視野検査を施行した。ゴールドマン動的視野計は再現性がやや低いため、光干渉断層計（OCT）による検査も加えるべきであった。また、無症状であるものの視野異常を発症している症例というのも含まれている可能性があるため、今後は傍前床突起部動脈瘤対するコイル塞栓術後症例は全例眼科的検査を行う事も研究として考慮していく必要があると思われた。

以上の理由により、本研究は博士(医学)の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した

別紙2

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第　　号	氏　名	大多和　賢登
試験担当者	主査 長紀敬	副査1 勝野 雅央	
	副査2 亀井 譲	指導教授 齋藤 竜太	

（試験の結果の要旨）

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 上下垂体動脈を温存することでの治療成績悪化の有無について
2. 上下垂体動脈可視化を試みた論文の有無について
3. ゴールドマン視野計による検査以外に行った眼科的検査について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、脳神経外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。